

五島列島における潜伏キリシタン墓の研究史 その1. 略史*

加藤 久雄** 野村 俊之***

Research history of hidden Christian tombs in the Goto Islands I

Hisao KATO **, Toshiyuki NOMURA ***

キーワード:

潜伏キリシタン、墓制、墓地、五島列島、研究史

1. はじめに

近年世界遺産『長崎と天草の潜伏キリシタン関連資産』指定に伴って、潜伏キリシタンに関する調査が進んでいるが、原城と集落景観を除けば、残りはカトリック復活後の関連資産であるのが実態である。この中で潜伏キリシタンの墓について言及しているのはわずかに平戸の春日集落の丸尾山(植野・井上 2012)、及び天草市の崎津集落の崎津古墓(田中 2017)のみである。

田中祐介は1. 墓地の考古学的調査、2. 石造墓碑の調査、3. 民俗学的調査、4. 史料調査の4点をあげており(田中 2012a)、ここでは主に1. の考古学的調査を主に扱う。

著者らは2009年から、五島市福江島平蔵木の口地区に所在する潜伏キリシタン墓地の調査研究を進めてきた。調査も大詰めを迎え、一旦研究史を振り返る必要を感じて本稿を起したが、民俗研究を除き、意外にも潜伏キリシタン墓の研究結果が公表されていないことに気づいた。そこで本稿では五島列島における研究史の概略に関して、著者らの研究報告を中心にまとめることとする。

2. 日本各地での潜伏キリシタン墓の研究状況

1998年の大阪府高槻城のキリシタン墓地調査からキリシタン墓の発掘調査例が注目されるようになった。大分県府内教会墓地(田中 2012a)・東京駅八重洲北口墓地(今野 2012)などである。いずれも、市街地に所在することから削平を受け上部構造は不明であるが、木棺もしくは直葬で長方形の墓坑形状や人骨の依存状況から伸展葬とされる。

このほか、長崎県平戸市ウシワキ遺跡では長方

形の石組の下に砂質のため平面形は明確ではないが伸展葬の人骨とともに長方形の木棺の痕跡が認められた(北島・塩塚 2009)。以上は調査の成果から布教期の墓地であることが、確定または推測されており潜伏期のキリシタン墓に該当しない。

また、2011年から大分県臼杵市野津の下藤遺跡の調査が行われた(臼杵市教育委員会編 2016)。この遺跡では長方形の石組や粗製の伏碑の地上表徴が明確に残っており、規格的な列埋葬、礼拝堂と考えられる遺構等が検出されている。同所では「常珎」銘伏碑や、「INRI」銘のある石製十字架頭部が発見されていることから(田中 2012a)、キリシタン墓群であることは首肯される。ただし、破碎された伏碑の墓石の散乱が認められること、銘のある墓碑自身がほとんど検出されていないことから、禁教時まで継続して営まれたものかどうかは不明とせざるを得ない。

ちなみにこのような成果は、2012年日本考古学協会福岡大会分科会で『キリシタン考古学の可能性』として集成されている(日本考古学協会2012年度福岡大会実行委員会 2012)。

さて、大分県御霊園クルスバ遺跡では下藤遺跡同様、長方形の石組遺構や粗製伏碑が残っており、一時期キリシタンの墓として機能していたことが考えられている(田中 2012b)。

このような伏碑については、豊後大野市岡のなまこ墓でも調査されており、時期の比定は難しいが、あるいは豊後における潜伏キリシタン墓の姿を垣間見ることができよう。

一方で、大石一久は2012年に、国内のキリシタン墓碑を集成した『日本キリシタン墓碑総覧』を編集している(大石 2012)。これには基本的に禁教期の潜伏キリシタン墓碑は含まれないが各墓石・墓碑の位置づけと分類を明確にした大著であり、以降のキリシタン墓碑研究の基準となるべき

* Received October 1, 2021

** 鎮西学院大学 現代社会学部 経済政策学科

*** 鎮西学院大学 地域総合研究所 客員研究員・石造遺産調査会

研究であると考え。その中で、わずかながら潜伏期の墓地についての概要報告がある。長崎市多良地区の垣内墓所で、古地図から原型を保っていることを確認し、長方形の板石を置く墓群を調査し、潜伏期のキリシタン墓地であると位置づけた（大石 2012）。同地は佐賀藩深堀領であり、大村藩による「長墓改」を逃れたものとされる。

本調査団も2013年から2014年にかけて大村領旧向地・浦上木場において「長墓改」で記録された墓所を巡検した。石積墓など、カトリック復帰する潜伏キリシタン集落と潜伏キリシタンの存在が禁教期に疑われていた集落の禁教期の墓制の事例を検討した（相川・加藤・野村・白濱 2014）。

天草市崎津集落の崎津古墓では、宗門改帳に記載のある人物の墓碑のほか、基壇状遺構とする組石墓を調査しており、これを九州で通有の潜伏キリシタン墓地の一つであろうと見ている、また隣接する白片墓地では「集石墓」を天草崩れ以降の墓地と推定している（田中 2017）。

また、天草市五和町に所在するペーが墓・岩宗墓地では方形ないしは長方形の板石が用いられており、キリシタン墓地として市指定文化財としている。これらの墓を潜伏キリシタン墓とする根拠として、大分県下藤墓地の事例と、分布の範囲がキリシタン集落とほぼ一致することを挙げている。更に、仏式墓石の成立や貞享4（1689）年の類族改令から築造時期を17世紀末までと推定している。なお板石上面には複数の粗雑な十字などが刻まれている、これはどの時期に行われたものかは明らかでないが、調査者は明治6年以降のものと推定している（平田・立石・大石・松本 2019）。この2墓地は山林中の人目につかない場所に営まれており、潜伏キリシタン墓がそのような立地にあるという一般概念とつながっていくと言えよう。

3. これまでの五島列島での研究状況

五島列島では、永禄5（1562）年領主宇久純定が病を得て、トーレス神父が派遣した医師ディエゴの治療を受けたことからカトリックとの接触が始まり、同9（1566）年宣教師アルメイダとロレンソが上陸したことから布教が開始された。もともと交易の中継地としてその前年ごろマカオからポルトガル人が上陸しているなど、それ以前にも西洋の文化と接触があったことは間違いなさだろう（福江市 1995；中園 2018など）。

純定自身はキリシタンとはならなかったが布教

を認め、跡を襲った純堯は洗礼名をドン・ルイスといい、その時期のキリスト教の布教は進んだ。その後を継いだ藩祖の純玄はバテレン追放令に従い、キリシタンの弾圧を行ったが、一方で黙認もしている。しかし、のちの初代藩主となる玄雅と信仰をめぐる対立し玄雅は一時長崎に退去している。純玄の陣没後玄雅藩主となり、自身がキリシタンでもあり寛容な宗教政策をとったが、一説では駿府に呼ばれて棄教し、その後一度も帰島しなかったという。棄教後はキリシタン弾圧が苛烈となり、次代盛利は徹底してキリシタン排除を行い入島の禁令をだした。その後も宗門改めを徹底し、かくして福江藩領内では組織的なキリシタンは少なくとも表面上途絶えてしまったとされる（福江市 1995など）。

しかしその後、福江藩の人口減少と殖産興業を目的とした移住政策により、大村藩からの移住者を招来しており、寛政9（1787）年に最初の公的移住者が福江の北に位置する六方の浜に上陸し、開墾地として平蔵の地を藩から与えられたとする、中園はこれに先立って明和9（1772）年に同じく福江島三井楽柏村と淵本村に入植したという記録を上げている（中園 2018）。これらの大部分は大村藩外海地区の潜伏キリシタンであったとされる。その後も公的移住をはじめ、大村藩の厳しい弾圧を避けるため伝手を頼って私的にも継続的に移住し、福江島から五島列島の各地へ散って小規模な集落を形成していった。

これら移住者は「居付き」と呼ばれ、寺請制度の中に組み込まれていったが、半ば黙認された信仰を秘密裏に維持し、生活の中で信仰儀礼を行っていたものと見られる。

この中で、当然のように死者も出ることとなり、墓を築く必要に迫られるわけであるが、葬送儀礼は仏式を取り、内々では潜伏キリシタン式の儀礼で執り行っていたと考えられるが、墓そのものの実態は明らかにはされてなかった。

その中でいち早く、荒木英市は参考資料としながら五島市久賀島の蔵町キリシタン墓を取り上げている。その記述によると現状では石を組み中央に角柱状の石を埋め込んだものとされ、その根拠を五島崩れのときの細石流の帳方の父と伝わっていることをあげられ、またこの帳方は肥後から逃れてきた潜伏キリシタン武士の末裔だとする聞き取りを行っている（荒木 2002）。この聞き取りが事実であるとするれば、大村藩からの移住者以外にも潜伏キリシタンが五島列島に移住し、集落の信

仰的指導者であったということになり興味深い。

また中園茂生は五島地方の信仰の実相として、新上五島町中通島深浦地区における葬送の状況として「丸桶に遺体を納めて埋葬し、上に屋形を置いた。」と記録している（中園 2018）。

北松浦郡小値賀町ホームページでは、過去野崎島にある舟森集落で発掘調査が行われ、埋葬法から潜伏キリシタンの墓と特定したという記事が見られる（参考資料1.）。

上五島鹿の子の山中ではほぼ方形の石組墓が残っており（大山 2012）、著者によればこのような形態は五島各地で見られるものとしている。

福江島でも黒蔵の旧墓地が潜伏期を含めたカクレキリシタンの墓であることは知られているが、実態はよくわかっていなかった。

4. 本調査団による研究の進展

このような中、2009年加藤久雄は、当時居住していた福江島で木口榮氏から木の口集落のそばの竹林に先祖の墓があり、数基の石組みを認め、木の口集落は移住者の集落であり、木口家はカクレキリシタンの信仰具を今も保持していることから、この墓所が潜伏キリシタンの墓を含めたものであろうと推測した。その立地は福江から戸岐へ向かう道を見下ろす丘陵上に営まれており、戦

後、一種の禁足地であったが、潜伏キリシタン墓が、人目につかない場所を選地して営まれるという過去の認識を新たにするものであった。その後木口氏は墓所管理のため当該地を伐開し、大略全貌が明らかになったことから、2012年株式会社有明測量社（当時）野村俊之の参加を得て予備調査をおこなった。このことが、福江島における潜伏キリシタン墓調査の嚆矢となるのである。

この調査に伴い、当該墓所に近世陶磁器片の散布を認め、翌2013年同島を訪れた熊本市観光文化交流局（当時）美濃口雅朗氏に鑑定を依頼したところ、18世紀後半以降の禁教期の遺物が含まれることが明らかになり、遅くとも19世紀初頭にはこの墓地が成立していることが推定された。

そこで、同年9月、加藤は調査団を組み、墓所配置の詳細な把握、石組墓の特性の把握、管理人による清掃に合わせた遺物の分布記録と、仮取り上げ、墓所の基本的な位置づけ、今後の調査方針と保護の手段検討を目的として第1次調査を実施した。この調査では現在も被葬者が眠る墓所として、現状変更を行わない、遺物の仮取り上げについては、調査後原位置に復することができるよう詳細な位置記録および映像記録を取ることに留意した。

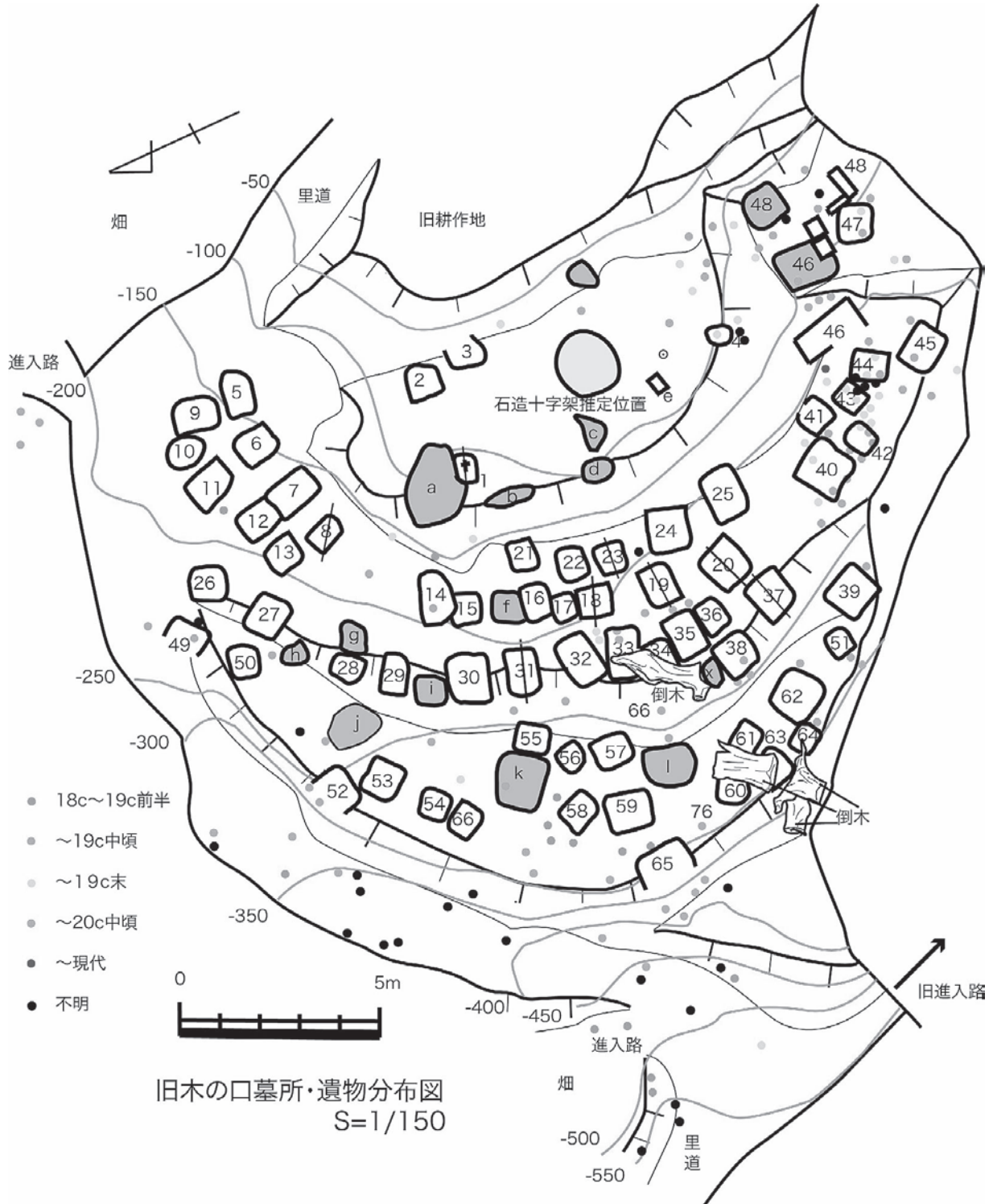


図1 旧木の口墓所・遺構・遺物分布図

この調査の結果、墓所は丘陵の尾根部分を3段に築成しており最上段が最も新しいこと、いくつかの改葬痕が認められ、カトリックへの改宗者の存在や、住居移転者が墓を他に移したという証言が裏付けられたこと、石組墓にはいくつかのパターンが有りそれが時代性や被葬者の性格を表す

ものであろうこと、僅かな例外を除き平面形は方形または略方形を示し、大村藩における「長墓改」の影響を受けたものであろうこと、使用石材の中には島内ではあろうが遠方から運ばれてきたものが含まれること、遺物では最古のものが18世紀後半の波佐見焼で、ついで18世紀末から19世紀

中頃に作られた陶磁器が見られること、最新のもののは戦後から昭和50年代に及び、移住期から戦後にいたるまで墓所の造営ないしは祭祀が続けられたこと等がある（加藤・野村・白濱・藤本 2014）。

これらの成果を受けて、同年墓所の配置原理を考察した（野村・加藤 2014）。分布図上で検討したところ遺物と石組墓の対比関係は薄く、これには遺物の原位置が明確でないことが影響していると見られる。また配置の粗密を考えて、3段に築成された区画のうち最上段は比較的新しく造成されたことが推測された。また略測ながら各平面形の法量を大型・中間型・中型・小型の4段階に分けて中型までを成人墓とするのなら、小児墓の数が極端に少なく、中型までを小児墓と考えるなら成人：小児墓の数がほぼ拮抗すると見られた。また平面形の縦横比も1：1前後が8割を占め、基本的に正方形に近い形状を示すことが明らかとなった、これは前述したとおり、移住の故地であった大村藩の「長墓改」の影響によるものと考えられる。

ここで得られた結果と臼杵市下藤キリシタン墓地、天草市白片共同墓地、大分市女狐近世墓地、筑紫野市原田1号墓地を取り上げて比較検討した結果について以下の考察をおこなった。1点目として、列埋葬と不定形な配列が混在しており、布教期前後のような整然とした規則性はないが、主軸がほとんどの場合等高線に直行するような配置がなされている、かつて最上段にあった中心十字架の存在を考えれば、近代以降にカトリック的配置が一時行われた可能性を示す。3基の例外を除いて墓石を持たないが、特に近代以降において木製の墓標を持つ可能性は否定できない。1基の成人墓に対して小児墓の配置がバランスが取れておらず家族墓的配列ではないが、中型を小児墓とすれば位階で年齢が推定されている女狐墓地とその構成比は近似する。改葬痕を除けば墓所の再整理はなく、配置はほぼ最終段階の景観を保っており、改葬痕があるという事実は、墓標のない一見規則性のない配置の中で、近現代のある時期まで、どの墓が誰の墓かという認識があったことを示す、これは戦後の供献遺物の存在でも裏付けられることなどが考察された。

次いで、翌2013年福江島内の関連する岳教会墓地・浜泊カトリック墓・踊瀬仏教墓地の巡見をおこなった。この成果は、北部九州各地の中世から布教期、禁教期の墓所資料と合わせて「石組墓の成立と変化の予察」（野村・加藤 2014）に記述さ

れている。岳教会墓地には石組墓も少数ながら残されており、これによって石組墓が近代以降もカトリック墓として継続することを示す。

また石組墓が中世の火葬墓や寺域の集団墓地に残されている事実や、北松浦地方の領主級の墓が長方形の石積み基壇によって構成されること、発掘された墓石を持たない石組墓に六道銭が副葬されることなどから、石組墓が潜伏キリシタン墓として成立した訳ではなく、伝統的な墓制を仮借しつつ、必然的に仏教名である戒名・法名を刻む墓石の建立を回避するために採用された可能性が高いことを、近代以降も維持する理由として「先祖伝来の墓」として採用し続けたことを想定した。しかしながら福江島においても旧来の墓がカロート式一族・家族墓に取って代わられつつある状況も見えてきており、旧木の口墓所の存在意義がますます重要視されることを再確認した。

同年、旧木の口墓所の2次調査を行ったが（加藤・野村・白濱・藤本 2015）、天候に恵まれず数基の追加実測と、遺物の仮採取、全石組墓の写真撮影にとどまった。

翌2015年、福江島内の主な潜伏キリシタン集落墓地の踏査がおこなわれた（加藤・野村 2016）。ここでは観音平・大泊・半泊・黒蔵（2箇所）・浜泊・貝津各墓所を中心に巡った。その結果、大泊の旧墓所では、カトリック墓とカクレキリシタンの墓域は明確に分かれており、カクレキリシタン墓では主に石組墓で構成されており、トタン製のタマヤが放棄されている状態で見いだされた。これはタマヤが一時的な施設として造立されたことを示す。一方のカトリック墓は石製の十字架立碑や伏碑が用いられている。また黒蔵では、前ノハルに所在する新しい墓地への移転が進み、2箇所の墓地はいずれもほぼ放棄されている状態で、それ故に旧来の造墓状況を保っていると考えられ、調査研究対象にふさわしい墓所であるが、墓域が広大であるため実施は難しいことなどがわかった。それぞれの墓地にある石組墓は人頭大の礫をほぼ正方形に並べ構成されていること、墓所移転がかなり進んでおり、上記の墓所は比較的原型をとどめていると言える。

2015年、これまでの仮採取遺物を図化が可能なものに限り全点の実測を行った。実測にあつては元福岡市教育委員会文化財整備課長井澤洋一氏の手を煩わせた。また観察表は熊本市役所 熊本城調査研究センター（当時）美濃口雅朗氏によるものである。最古のものは18世紀後半の波佐見焼の

丸碗、最新のもののは昭和50年代の磁器製の湯呑コップである。

ここでは画期を大きく4つに分けて18世紀から19世紀初頭の移住期・明治6年までの禁教期・第2次世界大戦終了までの近代とした。また、それ以降の現代とした。移住期では特に波佐見焼が目立つ、これは波佐見焼が後期潜伏キリシタンの故地である大村藩に由来するためであろうと考えられる、禁教期は広く肥前系の染め付けが見られる、これは当時の染め付けの流通状況を反映するものであろう。近現代に入るとさらに流通範囲は広がり、遠く瀬戸・美濃のものも流入してくる事がわかり、陶磁器流通が全国に広がる事が、離島である五島においても同様のものであることがわかる。

以上の成果をもとに同年、加藤を中心に表採遺物の組成と分布の数理的分析を行った(加藤・野村 2016)。ここでは画期をさらに細分化して、近代を3期に分け、墓域を上中下段の他、改葬された墓石のある2'段の4つに設定した。

まず、各区画ごとに遺物の製作時期を分析したところ、禁教期である1期の遺物の構成比は小細片が主であるが里道上に多く見られ、これは水流による流れ出しの結果と見る。ついで、下段、中段、上段、中段'の順に減少していき、自然移動の影響を勘案しても下段が最も古い墓域となる。一方復活期の遺物は上段でやや目立つものの中段'以外はほぼ同比である。逆に20世紀以降のものは中段'で卓越し、この部分が比較的最近まで祭祀が続けられたことが理解できる。

機種種の構成比は明治後半以降の3期で小杯が目立つものの各期を通じて碗類が卓越しており、墓前祭祀の実態を示すものである。内容物に関しては不明と言わざるをえない。なお、禁教期・復活期のみ皿破片が採取されており、より古い時代においては、皿になにかしらの食物を盛って供える風習があったのかもしれない。仏教で言う三具足とは香炉・花立・灯明であることを考えれば、竹筒で代用できかつ腐食する花立以外は、仏教的祭祀原理とは違ったものがあつたと考えられる。

2017年には3回目の福江島における墓所の分布調査を実施した。場所は南河原・玉之浦・小浦・貝津・嵯峨瀬・雨通宿仏教墓・繁敷カトリック墓・岐宿・T家墓所・淵の元・井持浦の神式墓所である。全般に新しいカロート式一族墓が多く、玉之浦墓所には石組墓が複数あるものの伏碑墓と共存している、復活期以降の造墓の可能性が残る。こ

のほかは貝津・淵の元・嵯峨瀬で石組墓を見出した。このうち嵯峨瀬では石組墓上に十字架を立碑したものがあり、潜伏期から復活期への過渡的形態の可能性もある。南河原墓所ではコンクリートブロックを組んだ墓があり石組墓の現代的変容と考えられる。同墓所にはトタン屋根ながら垂木を組み仮設とは考えられない構造のタマヤが数基石組墓の上に設置されている。タマヤは墓石を建てる前の仮施設として設置されるという証言があり、墓石を建立できない場合はそのままにしておくの話も聞いたが、南河原のタマヤは仮設とは思えないしっかりした作りである、永続的なものであろう。なお、玉之浦地区ではタマヤのことを「トマブキ(苔茸か?)」という聞き取りができた。

2017年には旧木の口墓所の悉皆実測を継続した。その成果から、石組墓の類型を外形からI~III類・充填物からA~C類、段数から1・2類、中央立石の有無からa類の4段階に分類した。これは編年や被葬者想定的基础となるものである(野村・加藤 2018)。

2018年には五島市奈留島の集落墓所の巡検を行った(野村・加藤 2019)。対象地は古巣・白這・夏井・大串・小田・宿輪・鈴ノ浦・南越・矢神・汐池・永這・椿原・大林・檜の木山のほか船廻と口ノ夏井地区である。大部分はカロート式の一族墓になっているが、矢神神社の裏手の山林の中には基壇状に積み上げられた石組墓が集中しており木の口・黒蔵に次ぐ良好なフィールドになりうると考えている。また白這地区には改葬後に放棄されたと考えられる底部穿孔のある肥前甕が残っており、あるいは潜伏キリシタンといえども近世末から近代には棺葬を採用していた可能性がある。また宿輪地区では、簡素なタマヤ一基が残っている他、放棄転落したタマヤも見られた、前述の聞き取り調査のように一時的な施設であった結果であろうと考える。口ノ夏井地区は潜伏キリシタン地域ではないが、路傍の小墓地に石組墓1基が残っている。このように石組墓は、必ずしも潜伏キリシタン特有のものではなく、後代のカトリック墓や神式墓の他にも簡易な地上表徴として採用されるものであろう。

同年、旧木の口墓所墓石の悉皆実測を石造遺産調査会の手によって完了した。さらに2018年には九州大名墓研究会により、悉皆実測時の実測ポイントを平板図上に落とし、更に洗い出された遺物を採取した。いずれも未報告である。

今後は標高・図根点の座標取得をもって現地

の調査を終える予定である。本年度中に実施を予定している。

謝辞

鎮西学院創立140周年を祝す記念号に、本学地域総合研究所から2013年度から断続的に補助をいただいている8カ年分の研究成果の概要をまとめていただいていた。調査にあたって全面的にご協力いただいた管理者である木口榮様他の地元の皆様、熊本市文化財課の美濃口雅朗氏、新上五島町教育委員会学芸員の松園奈穂氏（旧姓）、卒業生である佐賀県白石町教育委員会の白濱聖子氏（旧姓）、本研究プロジェクトにご協力いただいた本学の卒業生・学生諸氏に併せて感謝を表したい。

参考文献

相川和葉・加藤久雄・野村俊之・白濱聖子
2014：「「長墓改」以降の潜伏キリシタン墓の基礎的研究」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』12巻1号 51-62頁

天草市観光文化部世界資産推進室編 2017：「崎津集落墓地の調査成果」『崎津・今富集落調査報告書Ⅱ 葬送儀礼編』

荒木英市 2002：『九州のキリシタン墓碑』249-250頁 出島文庫

今野春樹 2012：「東日本のキリシタン遺跡と遺物」『一般社団法人日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』713-715頁

今野春樹 2013：『キリシタン考古学研究ーキリシタン遺跡を掘るー考古調査ハンドブック8』ニューサイエンス社

植野健治・井上典子 2012：「文化的景観の分析手法に関する報告ー無形の要素を中心とした「平戸島の文化的景観」の調査ー」『公益社団法人日本都市計画学会 都市計画報告書No.10』190頁

臼杵市教育委員会編：2016『下藤地区キリシタン墓地』

大山かおり 2012：「上五島のキリシタン史概論」『新上五島町崎浦の五島石集落景観 保存計画』新上五島町 235頁

大石一久編 2012：『日本キリシタン墓碑総覧 南島原市地域調査報告書』長崎文献社

加藤久雄・野村俊之 2016：「五島列島における潜伏キリシタン墓の分布に関する基礎的研究」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』14巻1号 61-69頁

加藤久雄・野村俊之 2017：「潜伏キリシタン墓の数理分析の視界」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』15巻1号 33-42頁

加藤久雄・野村俊之 2018：「五島列島における潜伏キリシタン墓の分布に関する基礎的研究2」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』16巻1号 17-30頁

加藤久雄・野村俊之・白濱聖子・藤本新之介
2014：「五島列島の潜伏キリシタン墓の研究」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』12巻1号 53-70頁

加藤久雄・野村俊之・白濱聖子・藤本新之介
2015：「五島列島の潜伏キリシタン墓の研究2」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』13巻1号 71-83頁』

神田高士 2012：「石塔はなぜ破壊されたのかー仏教からキリスト教へ」『下藤地区共有墓地の調査』1~12頁 おおいた石造文化研究会

北島聖美・塩塚浩一編 2009：「キリシタン寺院跡（上中津良教会跡）」「焼山」「ウシワキ遺跡」『市内遺跡確認調査報告書Ⅷ 平戸市の文化財62』平戸市教育委員会

田中祐介 2012a：「キリシタン墓地の構造」『一般社団法人日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』639-644頁

田中祐介 2012b：「石塔はなぜ破壊されたかー仏教からキリスト教へー」『御霊園クルスバの調査』13-18頁 おおいた石造文化研究会

田中祐介 2017：「崎津・今富の潜伏キリシタン時代の聖地と墓地」『崎津・今富集落調査報告書Ⅱ 葬送儀礼編』天草市観光文化部世界資産推進

室

中園茂生 2012:「解明されてきたキリシタンの実情ーキリシタン考古学の可能性ー」『一般社団法人日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』625-628頁

中園茂生 2018:『かくれキリシタンの起源ー信仰と信者の実相』弦書房 154-155頁、160頁

日本考古学協会2012年度福岡大会実行委員会編
2012:『一般社団法人日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』

野村俊之・加藤久雄 2018:「五島列島の潜伏キリシタン墓の研究4」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』16巻1号 39-52頁

野村俊之・加藤久雄 2019:「五島列島における潜伏キリシタン墓の分布に関する基礎的研究3」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』17巻1号 65-68頁

野村俊之・加藤久雄・白濱聖子 2016:「五島列島の潜伏キリシタン墓の研究3」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』14巻1号 41-60頁

野村俊之・加藤久雄・白濱聖子・藤本新之介
2014:「潜伏キリシタン墓の配置原理・旧木の口墓所」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』12巻1号 71-80頁

野村俊之・加藤久雄・白濱聖子・藤本新之介
2015:「石組墓成立と変化についての予察」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』13巻1号 36-46頁

平田豊弘・立石 綾・大石一久・松本博幸
2019:『キリシタン墓地調査報告書』天草市立キリシタン館

福江市 1995:『福江市史 上巻』福江市史編集委員会編 199-205頁

宮崎賢太郎 2008:『カクレキリシタン』長崎新聞社

参考資料

1. 長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産「野崎」<http://ojika.net/2018/07/30/> (20210926閲覧:参考)